
トビラの色

志咲 あさみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トビラの色

【コード】

N0920Y

【作者名】

志咲 あさみ

【あらすじ】

「宙のカギ」の番外編です。主人公以外の登場人物視点のお話となります。こちらだけでは何のこっちゃになると思うので、本編を先に読まれることをおすすめします。

目には見えねども（前書き）

こちら番外編です。本編「宙のカギ」を先に読まれることを強く推奨します。

目には見えねども

蝉が鳴いていると、夏も後半に向かっていているのかと惜しい気持ちになる。

何が惜しいか。もちろん時間だ。宿題なんてものを計画的にやる性質ではないし、夏休みと言ったら普段出来ないあれやこれを存分に堪能するための自由時間だろう？

忘れていた刻限を蝉の声で思い出すわけだ。

もうすぐ時間ですよ、準備しなさいよ　急ぎ立てられるように俄に俺は焦る。限られた時間でどれだけの事が出来るか、果たして悔いを残さずやりきれるのか。

分かったことは悔いはいくらでも作れるということ。

満足したようでもこれが重箱の隅をつつけば出てくるものなのだ。それというのも思考する力がなまじあるせいなのだろうが　…

…。「うまそうだな」

俺は隣に目を向ける。

ひと仕事終えた春夏が縁側、ビールの空き缶を脇の新しいものとすり替え、よどみない手つきで開け口へと運ぶ。

五分ほど前に「ほどほどにしてくださいよ」と忠告を残して千明は帰って行った。先に帰れと追い払われたのだ。まだ日のあるうちからがangan空けていく春夏が気になるのか、後ろ髪引かれる様子で帰って行くのが可笑しかった。

心配すんな、こいつはそういう気分なんだ。

俺はちよつと頭を傾けて、この家を改めて見やる。

ここは春夏の親友だったやつの家らしい　ああ、「だった」って過去形はよくないな。それじゃまるで関係が終わったみたいだ。そうだな、過去継続が正しいだろう。存在しないだけで仲がこじれたわけじゃない。春夏が切らない限り絆は繋がってる。

……はずだと思う。

この世にいない人間の心情なんて推し量る以外に分かる術がないのだ。間違っていたってその場にいなければ指摘しようがない。いや、いたって出来るのはごく一部に限られる。

「あんたも飲む？」

真新しい缶を開けて、春夏が俺の方に置いた。

「サンキュ」

礼を言っただけ俺は缶を持ってみた、持ってみようとした。それを春夏がじつと見てる。

俺の手は景品を掴み損ねたクレーンのように缶をすり抜けた。

「やっぱり駄目かあ」

諦観まじりに春夏がさつと缶を攫う。「悪かったな」と俺はふて腐れた。

どういう訳か、俺はまだこの世にいる。俗にいう幽霊というやつだ。しかしご覧の有様で、物に触れて存在をアピールしたりはできない。

幽霊になって分かったことは、死んだやつのが全てが幽霊になるわけじゃないこと。幽霊にもいろんな種類がいるということ。

俺はあちこち自由に動き回れるけれど、中には一点から動けず生前の情に取り残されているやつもいる。死んだ魚の様な目で延々呪めいた独り言を呟いているやつに遭遇した時はぞつとした。そいつは音も気配もなく一定周期で同じ所を徘徊していて、俺はそれを理解してから近づかないようにしている。その範囲に近づくと空気が淀んでいて息苦しくなるし、俺が俺でなくなりそうだから。

「っはあゝ、労働の後の一杯はうまい！」

「すでに一杯じゃないだろ」

縁側には空の缶が四　五本目が追加。「もっと買っとけば良かった」残念そうに最後の一本を取り出す春夏。

「ただ飲むつもりだったんだ。」

半目で見やると、何よと顔をしかめられる。別に何でもありません

んよ、とにつこり笑顔を作ればじと目で睨み返される。痛くもかゆくもないけどな。

ふん、と鼻を鳴らして蓋を開ける春夏。開けた瞬間の気の抜ける音が俺は好きだ。

「ねえ、瑛」

「ん？」

「枕に立つても、頭ごなしに叱ったりしたらだめよ」

「……しねえよ」

鼻に皺を寄せて返す。

夢枕なんていう現象を自由に起こせる力があれば望むところだ。

が、実際の所俺にそんな力はない。漫画みたいに寝てるあいつの頭許に立って見たがそんな奇跡は起こりやしなかった。

もしできるなら、あいつに言っただけでやりたいことは山のようにある。

秘密の隠し場所のDVDを処分してくれとか（幸いなことにまだ親には見つかっていない）、姉貴には気をつけるとか。

気にすんなよ……とか。

俺が死んだことをどうも自分のせいのように感じているらしいけど、そんなもの結果論だろと思う。事情なんてその時は知らなかったのだから。

俺だつて訳が分からないまま死んで優麗になって最初は戸惑ったけどさ。

今はそうじゃない。何に巻き込まれたか知ってるし、どう足掻いたつて死は覆せないことも理解している。

世の中大切なのは諦めだ。ああでも、片っ端から諦めている訳じゃない。出来ないこととっとと見切りをつけて、次に進む。それで時々見返すぐらいがちょうどいい。

……お前もそうしてくれるといいんだけどな。

今の俺は千明のお荷物だ。

復讐なんて非生産的なものを考えさせるくらいに。

おまけに恋愛感情に蓋をしようとしてやがる。

できるものなら一発殴って説教かましてやりたい。お前は何をやってるんだと。

でも現実俺にそんなことは出来なくて、俺は誰かに頼るしかない。たとえば今この隣にいる酔っぱらいのような、俺のことが視えるやつに。

「あんたの姿があの子にも見えたらいいんだけどねえ」

「まったくな」

「悩みすぎても碌なことにならないんだから。あとあの二人はさっさとくつつくべきだと思うの。お似合いじゃない？」

「そうか？ あいつにはもったいねえ美人じゃね？」

「男でも女でも相手が美人だと心配よね。ふふ、焼き餅焼く千明かあ」

何やら想像してにやつく春夏が気持ち悪い。

「あ、今「このおばさんきもっ！」って思ったでしょ？ 思ったでしょ？」

唾を飛ばして詰め寄ってくるのに俺は顔を背けて仰け反る。その通りだが答える義務はない。たとえそれが肯定しているのと変わりにくても。知ったことではない。

「ふーんだ」

いいけどさ、と捨て置いて春夏はビールを呷る。宙を見つめた姿勢で動きを止めると、短く息を吐いてしばらく何も言わない。おそらく一分ほどだったのだろうけど、俺はその間にじれた。何か言おうとしているのが分かったから。

やがて春夏が言った。

「もうすぐ盆だよ」

「……だな」

「誰も彼もが帰ってくるっていうじゃない。だからあたし期待しちゃうんだよね。毎年毎年さ。でもあたしには会いたくないのか会えないんだよ。もしかしたらあたしが思ってるだけで実は視えてるのはごく一部で、見えない部分にいるのかもしれないけどさ。今年は

ほら、あんたが視えるぐらいだから大丈夫なんじゃないかな……なんて思っちゃたり」

あはは、と乾いた笑い声が縁側で虚しく響く。

俺は保証の言葉を持たない。

会いたくないのか、視えないのか。俺には分からない。こいつの待ち人の顔を知らないから答えようがない。

「あー……、なくなっちゃった」

空き缶を試験管のように振って、春夏が残量を嘆く。どれだけ振っても水音など聞こえてこない。

「帰ってことですかね」

よっこいしょ、と春夏は億劫そうに立ち上がった。酔ってはいるが足下はしっかりしている。無用な心配をせずに済みそうだと俺は安堵した。

手慣れた様子で春夏は玄関に錠を下ろし、門扉に門をかけてしまふ。

「気をつけて帰れよ」

酔っぱらいは忠告には応えず、

「じゃあね」

空き缶の入ったレジ袋を片手に、大きく手を振って踵を返した。

俺はその場でしばらく遠ざかる背中を見送った。ついていこうかとも思ったけど、やめた。俺は春夏とは反対方向へ歩き出す。

行く宛などない。

おそらく知り合いに視える人間がいただけでも行幸なのだろう。

でなければ俺は早々狂いさまよい歩く化け物になっていた。

こうなることが分かっていたなら、俺は死ぬとしても幽霊だけにはしてくれるかと祈っただろう。行幸だと思いなから、俺の胸にはどうしようもない孤独が渦巻いている。

生きていれば死という終わりがある。

じゃあ、俺の終わりはどこにある？

成仏するしかないよ　ある幽霊はそう応えてくれた。物の試し

で俺は寺へ行ってみたけれど、近所のぼろい寺だったのがいけなかったのか今もこうして存在している。

「これからどうすっかな……」

行き場のない俺を急き立てるように蝉が鳴いている。命を散らしで鳴いている。もうすぐお仲間だよ、と俺は意地悪く腹で笑う。そして空しさに襲われる。

生まれて死んで、死んで生まれて。世界はその循環だというのに、こうして留まってふらふらしている俺は何なのだろう。

「知るか」

吐き捨てて唇を噛んだ。

考えるものか。思考の渦に飲み込まれて這い上がってこれなくなったら負けだ。何であれ俺はここにいる、それでいい、それでいいじゃないか。

俺は遠くの空を見た。

死んでみて分かったこと。

宇宙人は実在すること。

死者の全てが幽霊になる訳じゃないこと。

俺に大した力はないこと。

それと。

春夏には靈感があること　ただし視える「だけ」ということ。

いくら顔を合わせても声が届かないのは寂しい。

目には見えねども（後書き）

最初を誰にしようか迷って彼の話になりました。五話の裏側です。本編完結からかなり間が空いてしまいましたが、覚えていてくれた方がいたら嬉しいです。

次はあの妹君か犬の人の話になるかと思います。またしばしお付き合ってください（また間が空くかも……汗）。

妹の憂鬱（前書き）

こちら「宙のカギ」番外編です。ご注意ください。

「……………ちっ、」

自分で言うのもあれだけど、あたしは性格に難がある人間だと思う。

「ちょっと。学校終わってうち来るのはいいけど、我が物顔で居座って舌打ちはないんじゃない？」

「……………」

返す言葉もなく、あたしは部屋の主を見返した。

上下つなぎの作業服、その上から洗いざらしの白衣を纏って机に向かうシヨートボブカットの女。女性、ではなくそう表現するのがあたしの中ではしっくりくる。

その視線は手元の本に注がれていた。あたしの相手は読書のついでなのだ。

……………ふん、だ。

眉間に力がこもる。

そんなあたしを向こうが笑った気がした。背中を向けられているから見えやしないんだけど、だからこそか、邪推してしまう。あたしの機嫌など知ったこっちゃない、そういう人間だって分かっているのに。全く自意識過剰もいいところだ。

「そうそう、夜中眠気覚ましに散歩してたらさ」

急な話題転換はいつものことだから気にしない。それよりも、ちよつと聞き捨てならない単語にあたしは眉をひそめた。

「信じられない、この寒空に一人で散歩？」

夜中に一人歩きする危機感のなさ。おまけに季節は秋、それも紅葉の時分が終わりに差し掛かっている。それを、庭で星を探すならともかく、呑気に散歩だなんてありえない。

「そうよ。誰かいるなら散歩なんてしてないって」

分かるでしょ、と続けて彼女は鼻で笑う。

……話にならない。

この人に危機管理を説いても無駄だと悟って早々に諦めた。彼女とあたしの常識はこんなふうにして、よくずれる。

彼女、グレイスの通称は「博士」。由来はもちろん白衣によるところが多い。人が知識人に求めるイメージは色々あるだろうけれど、彼女にぴったりなのは「変人」の一言に尽きるとあたしは思う。

「んでさ、息白くなるじゃない？ ほらあたしいつも家の中にいるから、あーもうこんな寒くなってたんだなって思ったら楽しくなってきたやつて。子供みたいにふうふう息吐いてたわけ、風ん中。したら何かきらきらしてるから目を凝らしてみたら雪なの。帰って二ユース見たら初雪ですってさ」

「……」

一方的な感想の垂れ流し。

楽しかった、なんて言っている割に感情が乗っていないのが彼女の話し方の特徴だ。こちらから見えないけれど、きつと表情筋はぴくりともしていないだろう。

なんでこんな人がお姉ちゃん友人なんだろうと疑問に思う。：

…ああ、違った。あくまで知人なんだった。お姉ちゃんも友達とは言っていないかったつけ。

「で、アメル」

ようやく本が閉じられた。

「だからだろしたいならお家でやりなさいって言わなかった？ 残念だけど超能力者じゃないのよ？ 勝手のやってきて不機嫌オーラ振りまかれるあたしの身にもなって」

言い終わると同時に椅子がぐるりと廻って、彼女の切れ長の目があたしを捉えた。つまらないものを見るかのように。

嫌な目だ。自分がとんでもなく小物に感じられて、屈辱的な気分させられる。

お前に何が分かるんだ。

憤りかけて、はっとした。何も言っていないのだから、向こうが知るわけがない。

ああ、まったく。この女の言うとおりで本当、嫌になる。

「……なによ……」

ふて腐れるあたしに、

「それはこっちの科白だつっの。あのね、こちとらあんたにいちいち構ってる暇も優しさも若さもないの」

「……若さって、自分で言う？」

「事実から目を背けて得られるものはないもの」

「ふーん……」

なら言ってやるうじゃない。

「……ババア」

ぼそつと吐き出したら、半眼で一言、

「お帰りください」

あたしは鼻で笑ってやった。

「事実から目を背けないんでしょ？」

「指摘していいとは言っていない。用がないならとつと帰って」

しっし、と手で追い払われる。それも冗談ではなく本気だ。だからってそのまま回れ右はできない。

「……ねえ、あっちも冬なのか教えてよ」

言いながらあたしはソファアの背もたれに顔を埋めた。

呆れたように溜息をつくのが聞こえた。

「それくらい自分で訊きなさいよ」

「……やだ。……ネスのデータ、送られてきてるんでしょ、教えてよ」

「なに、喧嘩？」

「してない……っ」

自分の口から飛び出した尖った声に自分で驚いた。けど出て行ったものはもう手の施しようがない。

「ぶっん……」

返ってきたのは素っ気ない声。それがあたしの不安を煽る。だけどそんな自分が莫迦らしく思えた。どうしてあたしがこの人の機嫌を気にしなきゃいけないの。そう思うのに顔が上げられない。

「……………」
この夏。あたしはお姉ちゃんの所に、お姉ちゃんには秘密で押しかけた。しかもその時お姉ちゃんの（たぶん）好きな人間相手に暴れたから、きついお説教を喰らってしまった。それから何だか気まぐずくて、連絡をとっていない。

お姉ちゃんとは縁を切った状態だから、あたしから連絡しない限り向こうからはしてこない。お姉ちゃんはそういうところ、非情だ。

でも喧嘩じゃない。あたしが一人気になっているだけ。

……………椅子がぎいぎい激しく軋む音がする。きつと回転させて遊んでいるんだろう。

「あつちが冬だったらどうなの？」

「別に……………どうもしないけど」

「じゃあ、知る必要ないわね」

「……………そんなのそっちが決めないですよ」

「人のことババアって言った口でまあ、いけしゃあしゃあと」

「それとこれは別でしょ」

「……………ああもう。うざいな」

髪をかき乱す音に本気を感じた。怒らせる前に切り上げないと本当に出入り禁止にされそうだ。

顔あげるとひどく醒めた目があたしを見据えていた。うなじのあたりがぴりぴりする。この人はあたしがお姉ちゃんの妹だから付き合ってくれているだけなんだと意識を改めさせられた。

「……………教えて、ください」

彼女が溜息をつく。最初からそう言えよと、顔にはつきり書いてあった。

お返しにあたしも、おまえなんか嫌いだと顔に貼り付けた。

外に出ると木枯らしに混じって白い物が舞っている。

「……ちっ、」

舌打ちして宙を睨む。

あたしはこの時分が、というよりこの光景がととても嫌いだ。嫌でもあの日を思い出すから。

十年前だ。今日みたいな天気の日だった。雪にはしゃぐあたしはバランスを崩して隣にいた姉の服を掴んだ。それがいけなかった。歳は一つしか違わない、背格好も大差ない彼女にあたしが支えられるわけもなく、あたしたちは二人して地面を転がった。その時お姉ちゃんは頭を打って（それが原因だろうという話だけど偉い人にもよく分からないらしい）、魔眼持ちになってしまった。

あたしがお姉ちゃんの人生を狂わせた。

アメルのせいじゃないよ　お姉ちゃんと言う。だけどいくら言われてもあたしの心が晴れることはない。この先も、きっと。

あたしは彼女が歩くその道を成り変わってゆくことができないから、だから願う。

お姉ちゃんには幸せになって貰いたい。

そう切実に願うけれど、けれどお姉ちゃんはいつだって自分のことは自分で決めてあたしの前を歩いて行くから。追いかけるけど、そうしたら立ち止まって振り返ってくれるけれど、それもほんの一時で。

ねえ、それでいいの、ほんとに幸せなの？

背中に投げかける。途方に暮れてあたしは立ち止まる。背中は遠くなる。お姉ちゃんにあたしは要らないのかな。答えが怖くてそんなことは訊けない。

力になりたいと願いながらあたしはいつだって二の足を踏んでいく。

お前のせいだと踏みにじられ絶望する日を迎えたくないから。幸せになつて貰いたい？

本当は赦されたいだけ。

彼女が幸せになれば、あたしの罪も昇華されるんじゃないかって。

そんな期待がないって言い切れる？

「……………」

雪を避けるようにあたしは早足で進む。

……………なんでお姉ちゃんはある男を選んだの。

過ぎつた顔に怒りがこみ上げてきて、あたしはまた舌打ちをした。あたしのしたいことをできるかもしれない男。

……………幸せにする気がないならさっさと別れてよ。

舞う雪の量がだんだん増えてきて、あたしの心は一層ささくれだつ。

「……………最っ低」

吐き捨てた先が空模様かあたし自身へなのかは定かじゃない。

妹の憂鬱（後書き）

妹アメルのお話です（碌に説明もなく新キャラ登場してますが）。

ぼちぼち第二の本編「鍵ってなんなの本当にあるの？」編をやる
うと思います。ので、番外編は一時休止となります（二話しか書い
てないのにね）。

次はもう少し間を置かないで上げられたらな……とか言ってる前
に書け、ですね……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0920y/>

トビラの色

2011年11月26日23時48分発行